

検証委員会委員による被災地調査報告

1 調査目的及び調査内容

胆振東部地震災害等に関し、被災3町における災害対応と住民の認識などについて、ヒアリング形式で現地調査を行い、評価できる事項及び課題などを把握し、状況の検証を行うもの

2 調査日程

平成31年1月30日（水）

- ・むかわ町（むかわ町役場[町長ほか]、地域住民[3名]）
- ・厚真町（厚真町役場[町長ほか]、地域住民[3名]）
- ・安平町（安平町役場[町長ほか]、地域住民[7名]）

検証委員：佐々木委員 根本委員 細川委員

3 ヒアリング項目

✓被害情報収集・通信 ✓住民の避難行動 ✓避難勧告等の発令 ✓避難所運営 ✓仮設住宅 ✓支援物資 ✓職員の体制 ✓ライフライン ✓ボランティア ✓関係機関の行政支援 ✓防災教育 ✓要配慮者等の対応 等



むかわ町でのヒアリング



厚真町でのヒアリング



安平町でのヒアリング



被災市町村での現地調査結果の概要

項 目	市 町 村	住 民
地震災害に対する認識	<ul style="list-style-type: none"> ■ 住民は実感が湧いていない様子であり、被災者同士話し合うことで、ショックを和らげようとしている感じであった ■ 誰もが経験するということではない規模の災害であり、手探りの状態だった ■ 町中の街路沿いでは、耐震基準を満たさない建物に被害が多く発生し、また、揺れの強かった方向（東西方向）に間口の広い建物（主に店舗等）で被害が発生した ■ 建物の耐震については、今後再建と同じく考えて行きたい 	<ul style="list-style-type: none"> ■ このような大きな地震が来るとは夢にも思わず、他人事のように思っていた ■ 二階建て建物の一階部分が潰れているのに気づかなかった ■ 冬期や日中に地震が起こっていたら、火災なども発生し、より被害が大きかったと思う ■ 不思議な感覚で、発災直後は、以外とあたふたとならないものだった ■ 周困で亡くなった人がいたかないかで、住民の雰囲気は大きく異なる ■ 地震発生時は暗さで周りが見えなかった事もあり、怖さはあまりなかった ■ 懐中電灯や携帯電話のほか、スリッパ、眼鏡、入歯、車の鍵、常備薬などは近くに置いておくとともに、地震でも飛んでいかないようにしておくが良い ■ 前日の台風で、かなりの雨と強風があり、樹木が浮き上がっている状態だったから、山腹崩壊になったと思う
災害情報の収集・通信の状況	<ul style="list-style-type: none"> ■ ほとんどの職員が自動登庁し、職員が地区連絡員として地域を回り、役場に安否確認等を報告した ■ 一部の被災町の全戸に防災無線が設置されており、4時頃に全戸に対して情報を発信した ■ 情報伝達については、防災無線の屋外拡声器及び個別受信機(市街地以外と町内会長に配布)により実施した 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 役場は発災後すぐに対応してくれた。発災後数日の間は、情報の入手が難しかったのは仕方がない ■ 避難所内で住民のリーダーを決め、その者が情報の入手・確認などをすべきであった ■ 避難所ではなく、被災を免れた親戚宅等へ一時的に避難した町民については、役場では把握も難しいため、その方に対する情報の提供方法に課題

項 目	市 町 村	住 民
災害情報の収集・通信の状況	<ul style="list-style-type: none"> ■ 一部の被災町では、自主防災組織や自治会が巡回するなどして把握した情報のほか、住民からの土砂崩れの情報なども役場に入ってきた ■ 一部の被災町では、電話やアナログ無線を活用し、消防団、警察、自主防災組織、住民から情報を収集した ■ 地震による通信障害により、震度データが気象台に入電されず、迅速に震度を把握することが出来なかった ■ SNSに大きな地震が来るとデマが流れ、対応が困難であったが、本部会議内で、根拠がない旨を、気象台に発言してもらった ■ 情報提供については、発信しているつもりになっていた HPやフェイスブックなどで発信したが、年配者などへ情報が行き渡らないという課題もあり、要望も踏まえ、紙ベースでの情報発信も行った（紙の重要性もあると感じた） ■ 高齢者見守りの体制を構築しており、その情報も入ってきた ■ 町災対本部員会議などの各種会議の様子や、罹災証明等の申請などに関する情報を、テレビによるエリア放送で発信するなど、地元住民への情報提供に努めた ■ 報道対応の窓口を総務課長に一本化したほか、定期的に報道機関に対する情報提供に努めた ■ ペットは感染症の原因になるといったデマ情報が流れた 	<p>があると思われるが、避難した者自らが情報の入手を行う必要がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 大きな地震が来るといったデマが避難所内で流れていた

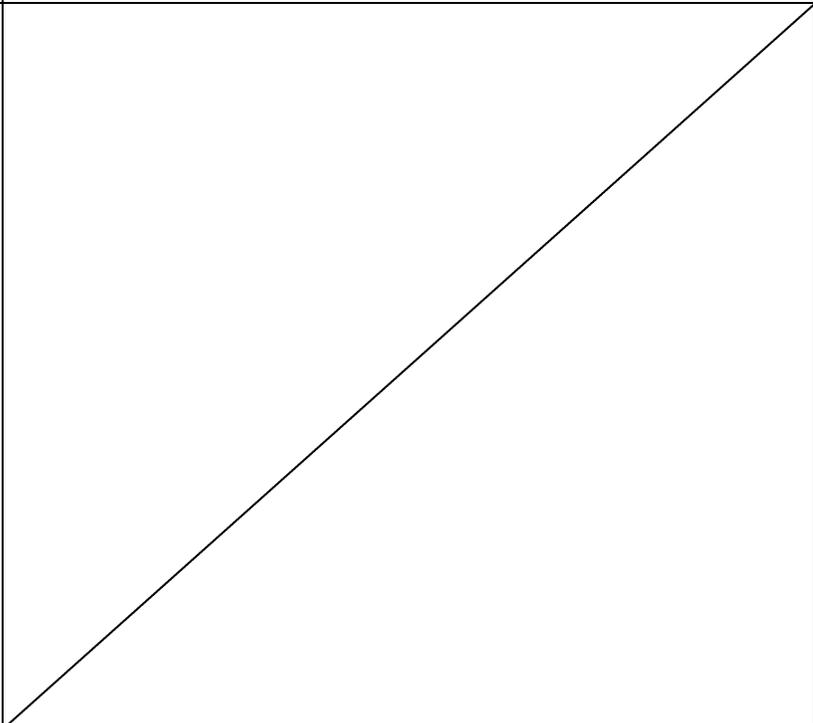
項 目	市 町 村	住 民
避難勧告等の発令 避難誘導 住民の避難行動	<ul style="list-style-type: none"> ■ 津波の有無について気象台に確認した結果、若干の海面変動があるとの情報が有り、沿岸部の住民に対して自主避難を呼びかけた ■ 訓練を実施したばかりということもあり、住民の多くが山間部に自主避難したことで、一時的に渋滞が発生した ■ 全壊・半壊の住民が多く、余震を恐れて避難する方もいた ■ 避難者数は、発災日（6日）の夕方が最も多かった ■ 車中泊をしている住民がおり、避難所に入ってもらうのに苦慮した 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 周囲の家や両親の安否確認をしようとしたが、電話が使用できず、また、道路や橋の両側が通行できない状況であった ■ 近所の住民同士が携帯電話で連絡を取りあい、近くの施設に集合し、集団避難をした ■ 通行が可能であった農道を通り、途中の高齢者宅にも声かけして避難を実施した ■ 停電で真っ暗であり、ただ呆然とする状態だった ■ 自力で避難所に行くことが困難な地域だったため、ヘリでの救助を待った。前日の台風で近くの川が増水しており、救助を待つ間に農機具などを高台に上げた ■ 避難所に着いて、周囲の人の顔が見えたことで安心した ■ 安否確認について、自治会員から各地区長に報告することとしていたことから、発災時その方法で安否の確認を行い、4時頃には役場に報告することができた ■ ペットを飼っていることを理由に避難しない人がいた ■ 独居老人は、避難所生活（共同生活等）を嫌い、避難しない人が多かった ■ 発災時、周辺住民の安否を確認したが、津波が想定される場合にそこまで出来るかは分からない ■ ドアが開かないなど、家からすぐに出られない人も多くいた ■ 消防に救助され、消防署で一日保護された後、避難所に向かった

項 目	市 町 村	住 民
避難勧告等の発令 避難誘導 住民の避難行動		<ul style="list-style-type: none"> ■ 車があると安心の第一歩になる。車の鍵については、発災時でもすぐに取り出せるようにしなくてはならない ■ 地震による建物倒壊の不安から、家に問題なくても避難している人や、建物の中で生活することが不安で、車中泊している人もいた
避難所運営	<ul style="list-style-type: none"> ■ 3時40分には町長から避難所開設の指示が出され、4時30分くらいには全て開設できた ■ 発災直後から、多くの町職員が避難所運営に入り、24時間体制で運営した。職員の疲労度を考慮し、避難所運営で代表的な職員にローテーションによる対応の話をしたが、避難所開設直後はローテーションが上手くいってない避難所もあった ■ 当初は役場職員による運営を行ったが、すぐに近隣の自治体や道から応援の職員が入ったため、一部の被災町では、日中は応援職員に任せる形をとった ■ 被災町の一部では、発災当日から避難者名簿を作成し、避難所を集約した際には、退所出来ない理由なども盛り込み整理した ■ 全職員が見ていたかは不明であるが、避難所運営マニュアルは作成してあった ■ 東北から避難所支援に来ていただいていた方には、避難所の運営に詳しい方がおり、毎日のように避難所運営会議でアドバイス等があった ■ 一部の被災町では、避難所開設時の受入の際の名簿作成はできなかったが、その後名簿を作成し、外出時に受付に声をかけてもらい入退室の管理ができた 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 至れり尽くせりで感謝の一言でしかない。食事でも美味しい物を出してもらった。集団生活で窮屈なところはあったが、こんなに良くしてもらえるのかなと思った ■ マスコミ等が入ってきても、避難所の中は安心だった ■ 段ボールベッドが入ったことにより、少し眠れるようになった ■ 役場の協力により自主防災組織を組織し、避難等に必要な備品の支援もいただいております、自主避難場所と決めていた会館等を住民主体で開設することができた ■ 町内会で防災倉庫を管理しているほか、災害時の自主避難場所を予め決めていたことから、発災から1時後には避難所の開設ができた ■ 停電や断水により地域の自主避難場所が使用できなかったことから、隣接する町内会と相談し、停電や断水していない施設に避難するなど臨機応援に対応できた。また、地域単位で避難できたことから、顔見知りと一緒に避難することにより避難所は比較的和気あいあいとした雰囲気よかった ■ ペットと一緒に避難してきた人のために、避難所入口に段ボールで犬小屋をつくるなどペット同行避難にも対応できた

項 目	市 町 村	住 民
避難所運営	<ul style="list-style-type: none"> ■ 避難所の自主運営のイメージは持っていたが日中の避難者は高齢者が多く、難しい状況だった ■ 発災直後、施設の水洗トイレが使用できなくなり、水分を取らない高齢者へのケアを要した ■ 発災当日から仮設トイレを順次設置することができたため、備蓄の簡易トイレは、ほとんど使用しなくて済んだ ■ 避難所運営の支援をいただいていた職員には男性が多く、女性トイレの掃除に苦慮した ■ 段ボールベッドの効果は高かった ■ 一部の被災町では、段ボールベッドが早い段階で導入されたが、高齢者など短期間でも、想像以上に筋力の低下がみられることを実感した ■ 段ボールベッドの導入により、環境改善が出来たが、より早期に導入すべきだった ■ 近隣町より支援物資としてテントが届き、避難所内でのプライバシー確保に活用できた ■ 避難所で発生する生ゴミの処理については、早い段階から定期回収業者と契約できた ■ 感染症対策についての資料全てに目を通してはいる状態ではなかったが、日赤の救護班チームや、派遣された医療系スタッフの指導により対応できた ■ アルコールによるトラブルや、精神疾患の方に対する夜間の対応など、医療系スタッフの派遣がありがたかった ■ 避難者が連れてきたペットについては、中学校の音楽室で受け入れた 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 発災から3日で道からコンテナトイレが届き、非常に助かった ■ 避難所においては、少しの音で目を覚ましてしまう人などもいて、また、その周囲でも目を覚ましてしまう人がいた ■ 避難所内で早めに住民のリーダーを作る必要があると感じた

項 目	市 町 村	住 民
避難所運営	<ul style="list-style-type: none"> ■ ペット避難に関する相談があった場合には、NPO法人とも相談しながら拒否せず対応することができた ■ 子供がいる世帯については、スポーツセンターに集約するなど家族の状況に配慮して集約した ■ 小学校等の早期再開を目指し、地域住民の理解をいただきながら、避難所を公民館等に集約することができた ■ 避難者への食事の提供やケアは非常に重要であるが、一方で今後仮設住宅等での生活を考えた場合には、避難者の自立も考える必要があった ■ 食事については、備蓄及び災害時協定の活用により、当初から不足することはなかった ■ 町の栄養士の考えた献立により、自衛隊の炊き出しやコンビニ弁当の発注を行うなど、避難者の健康面に配慮することができた ■ 自衛隊による給食支援の終了後は、配食サービスを活用するとともに、学校給食を拡大し避難者に提供した ■ 避難所内で事件、トラブルなどは起きなかった ■ 避難者の健康面などについては、日本赤十字社やDMAT、応援の保健師が迅速に入ってくれたので、心配は無かった ■ 報道機関が避難所内を無許可で撮影したケースがあり、役場から注意をした 	

項 目	市 町 村	住 民
仮設住宅	<ul style="list-style-type: none"> ■ 避難者の生活再建を最優先するため、町外の見なし仮設住宅も積極的に斡旋してきたが、現在、仮設住宅が多少余っているのので、できれば町内の仮設住宅に移転してもらいたいと思っているが、法的に難しい ■ 仮設住宅にペットも可能とした 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮設住宅は暖かく、2年で使わなくなるのはもったいない。世帯構成によっては、2名で2部屋となり、寝室を分けた場合、居間などが用意出来ない ■ 仮設住宅の互いの生活音、屋根が風で鳴る音などが気になる。基本的にワンルームという生活に慣れていない ■ 世帯の人数により間取りを決めているが、世帯構成も考慮して対応してくれるのが良い ■ 仮設住宅は、狭いことは狭いが、それなりに皆、工夫してやっていこうということにしている ■ 仮設住宅の入居者が、福祉センターで月に1度会合を開き、除雪や住環境のことを話合うなどしており、効果がある。氏名の公表を基本としている団地（地区）もある
支援物資	<ul style="list-style-type: none"> ■ 発災直後は、町の備蓄のほか、町内の商店から物資の提供があり、対応ができた。また発災直後の飲料など、不足しそうな物はホームページで発信したところ、直ぐに届いた ■ 国からのプッシュ型のほか、全国からの支援物資もあり、物によっては希望の商品がないなどもあったが、全体として不足は感じなかった ■ 物資は早い段階から来たので、住民も安心できたようであった。量が多く来たことも安心に繋がったのではないかと考える ■ 計画やマニュアルで決めていた訳ではないが、発災からそれほどかからずに、町内の大きなスポーツ施設を物資の集積拠点とすることができた ■ 発災当初は町備蓄品（アルファ米と水）で対応したが、すぐに地元の農家やスーパーが物資を支援してくれた 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 全国から心温まる支援があり、感謝している ■ 地震では物を持ち出せない場合も有り、赤ん坊がいるなどの事情がなければ、個人の備蓄にこだわる必要があるのかわからない ■ 今回の震災で食事に困るようなことはなかった

項 目	市 町 村	住 民
支援物資	<ul style="list-style-type: none"> ■ 国（プッシュ型支援）や道から支援物資が早い段階で到着したほか、町以外の方からも多くの物資が届いた ■ 通信事業者からからタブレットを借用し、避難所での必要物資の集約等に活用した ■ 食料や飲料水は十分にあったが、当初は食事用の容器などが不足し、SNSに呼びかけたが、すぐに数が集まった ■ 発災当初、個人の支援物資に対する対応で職員の手が取られた ■ 物資集積所における管理・輸送を専門事業者に担ってもらい非常に助かった ■ 物資集積は一箇所に集約すべきだった 	
職員の体制（災害対策本部等）	<ul style="list-style-type: none"> ■ 震度5弱以上で、全職員が自動登庁することになっており、小さい子供などがおり、参集出来なかった職員もいたが、ほとんどの職員が速やかに参集した（登庁していない職員にはメール送信した町もあった） ■ 役場庁舎は、自家発電により稼働できた ■ 役場庁舎は、隣接する建物の自家発電から電力が供給されるため、電力は問題なかった ■ 町長、副町長、総務課長が同じ場所において、各課等からの報告を同時に聞く体制をとっていた ■ 職員は自宅にも帰れず、1日1食など余ったものを食べるなど大変だった 	

項 目	市 町 村	住 民
ライフライン	<ul style="list-style-type: none"> ■ 携帯電話は、発災直後は使えていたが途中でダウンしたが、臨時基地局が設置され、順次、使用可能になった ■ 避難所については、自家発電や災害時防災協定を活用し、発災当日から照明をつける事ができた ■ 停電が発生し電気がなく、ストーブが動かないことを考えると、冬期間に同様のことが起こった際の対応は考えなくてはならない 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 国や道が、一体となってライフラインの復旧に対応してくれたことに感謝している ■ 農村地域は、食料品の備蓄や小型発電機など持っている方が多く、停電については対応できた ■ 断水により水くみが大変であったが、自衛隊が協力してくれて助かった ■ 携帯トイレ等の備蓄が無く、断水により、特にトイレが困った。一部の地域では、自主防災組織で事前に購入していたポリバケツに水を溜めて使用した ■ 前日までの台風で備え、風呂の水を捨てずに溜めておいたため活用できたが、断水への対策が必要だと思った（発災後は、風呂の水は捨てないようにしている） ■ 燃料については、翌日くらいから心配になった。JAの給油所が一人千円分まで給油してくれた ■ 偶然、車の燃料が満タンに近く、非常に安心した ■ 車の燃料については、（多めに）入れておいた方が良い
ボランティア	<ul style="list-style-type: none"> ■ ボランティアセンターを立ち上げ、9月8日には募集を開始できた ■ 全体的にボランティアの不足感は、ほぼ無かったが、登録制にしてからは、予め住民からの依頼に見合った人数を見込んで調整していたが、週末などに急に住民からの依頼が多くなった場合は、ボランティアが足りなくなることがあった 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 見事な活動で、頭が下がる。どこで恩返しできるのかなという感じ ■ 立入許可が出た際に、即座に支援の声かけがあって、助かった ■ 仮設住宅の談話室にボランティアが来ることもある

項 目	市 町 村	住 民
ボランティア	<ul style="list-style-type: none"> ■ 家屋の片付けなどに対するボランティアの要請に対して、活動場所の危険の有無などを判断するのが難しかった ■ ボランティアの受入方法は被災地毎にバラバラの方式であった。受入前に共通のものを検討したり、インターネット上の入力様式といった基本部分を準備しておけば、もう少しスムーズにボランティアの受け入れができたのではないかと思う ■ 避難者に対してニーズを調査し、家の片付けなどを依頼し、帰宅できる環境づくりをしてもらった 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 一人では運べない荷物を運んでくれたりと非常に助かった ■ 住家が応急危険度判定で危険判定を受けており、ボランティアを頼むことが出来なかった
関係機関(道など)の支援や連絡体制	<ul style="list-style-type: none"> ■ 罹災証明については、対口支援で東北の県からスペシャリストが来てくれたほか、道や道内市町村からも職員の派遣があり、スムーズに発行できた ■ 避難所運営についても、道庁から早い段階で職員の派遣があった ■ 発災後、速やかにリエゾンが入ってきたことで、国や道から必要な情報を入手できた ■ 早期の人的支援により、役場の人員を確保出来たため、町民に寄り添った対応が出来た 	
防災教育(平常時の取組)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 自主防災組織となっていない自治会には、補助金を活用するなどして自主防災組織化をお願いしている ■ 普段から防災キャンプの開催などに積極的に取組んでいた ■ 9月1日の防災の日に訓練を実施していた 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 発災1ヶ月前にHUGなどの防災訓練を実施していた ■ 役場と協力し、訓練の実施や備品等の備蓄など住民意識も高く、今回の胆振東部地震では役に立つことが多かった ■ 普段から枕元に懐中電灯、長靴、スリッパなど置いていた

項 目	市 町 村	住 民
防災教育 (平常時の取組)		<ul style="list-style-type: none"> ■ 役場の協力により自主防災組織（組織率 5 割）を組織しているほか、防災倉庫に避難に必要な備品等を保管している ■ 前日までの台風もあり、非常持ち出し品を確認していた ■ 災害時、絶対に必要となる物などは本人や家族にしか分からない部分がある ■ いろいろな活動をしている人を役場の人指名していくなど、リーダーづくりが必要である
要配慮者や社会福祉施設に係る対応	<ul style="list-style-type: none"> ■ 福祉避難所を開設した ■ 避難行動要支援者名簿を使って情報を集めた ■ 要支援者名簿は、システムは導入されているものの必要な情報が更新されていないなど、完全にできているものはなかった ■ 停電によりシステムがダウンして使えない状態だったが、紙に打ち出したものもなかったことから、戸籍担当部局で出している全住民リストに必要な事項を書き込むなどしながら、状況の電話確認や訪問に活用した 一部の町では、住民名簿等から要配慮者や 65 歳以上の安否の確認を行った ■ 必要なデータの入力や更新、紙への打ち出しなどの決めごとや、管理責任者の設定などのルール化が必要だと感じた ■ 在宅酸素を要する方に対して、事業者から連絡が入ったことを町の保健師が確認した ■ 車いすの避難者については、福祉センターの一室を救護室として使用した 	

項 目	市 町 村	住 民
要配慮者や社会福祉施設に係る対応	<ul style="list-style-type: none"> ■ 人工透析が必要な方については、発災当日から社会福祉協議会によるバス送迎で対応した ■ ヘルパー協会と連携して対応した 	
その他	<ul style="list-style-type: none"> ■ 災害ゴミについては、9月8日にいち早く一次堆積所を設置することができた ■ 道などから多数の支援をいただいたが、発災2ヶ月後から、どうしても足りない状況であり、人的支援をお願いしたい ■ しっかりとした技術的、人材的フォローを引き続きお願いする。職員は頼りにしているし、モチベーションにも繋がる ■ 大規模な災害が過疎地で起こった場合に、どのような支援ができるのか、機動性のある部隊の備えなど、法制度化が必要だと訴えてほしい ■ ボランティアで来てくれた方(10名)、引き続き、町町に定住してくれることになっている ■ 町としても検証を行い、今後、地域防災計画にどう盛り込んでいくかなどを考えていく ■ 発災後にどのようなタイミングで、どのような業務が新たに発生するのかなどについて、道からの情報提供が欲しかった 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 若い農業者は、住宅も農機具もない、水田には土砂が流入しているという状況で、今後の方針を立てられないでいる。色々な角度から支援し、助けてほしい（冬場に立てる営農計画も立てられず、補償もどうなるか分からない状態） ■ エゾシカ対策の柵も地震で寸断したところがあり、営農にあたって、それらの対策も必要 ■ いち早く工事をしていただき、復旧、一日も早く元の姿に戻してほしい。未永く面倒を見てほしい ■ 応急危険度判定で赤、黄、緑の紙が張られていたが、詳細な説明はなく、周囲の噂が先行する状態だった ■ 警察の見回りもあったほか、消防団も一日3回ほどの見回りを2月ほど続けていた